

巻頭言

イモの復権と祭り

財団法人 いも類振興会

理事長 生天目 健 蔵

近年、「サツマイモ復権」と銘うって、イモ祭りが各地で催されている。筆者も、昨年は各地から招かれたが、そのうち、埼玉会館、川越の福原農協、千葉の栗源(クリモト)の催しを参観した。最後の催しについては、北崎順一さんに、前号に紹介して貰った。

埼玉会館の催しは、大規模なもので300点あまり展示され、文献、古文書、書籍等多数蒐集され、殊に埼玉の甘藷の歴史を明らかにしたことは、特筆大書するにあたいしたが、折角の焼芋の釜が、会場入口に放置された儘であったことは、残念であった。

川越の福原農協の場合は、第四回目の催しだということであったが、イモ祭りというよりは、農業会の祭りというべきで、広場の日用雑貨品、衣糧品、米、魚等のバザー、テント張りの軽食コーナーの方が大繁昌で、肝心の甘藷の方は、二階にサンプルが陳列されているお寒い風景であった。しかし、ここでは宅送便の制度を活用して、全国的に甘藷、里芋等の配送受付を実施していたことは、需要拡大を図る上で当を得た作戦であった。

栗源の催しは、会場も大規模だが、各生産農家が、それぞれ5キロ宛箱に入れて出品し、旧来のサツマイモの概念を吹き飛ばす肥大さで、ベニコマチどころではなく、ベニ小錦とでもいうような出色のものばかりであった。殊に、イモ料理の数々は、近代的な趣向と発

想で、参観者に大きな希望と刺激を与えたことと思われる。ただ、外部の需要者に、簡単に応じてあげる宅送便等の受付が整備されていなかったことは、販路拡張等の要望からは遺憾なことであった。

ところで、「イモの復権」というが、イモの話題が多くなったというだけでは、まだまだである。この8月、テレビ東京は「イモは主食であった」という一時間ものを放映していたが、これは戦中戦後の食糧難の時代のことである。「復権」が主食の座の回復という意味なら、そんな復権はない方がいいし、また二度とあるべきではない。

然らば、イモの権利の回復とは何ぞやということになる。生産農家にとっては、イモが増産されて、安定的な価格で、取引されることであろう。しかし、消費者にとっては、焼芋として、量的に多くを賞味することではない筈だ。一昨年は焼酎ブームで、したがってイモから作られた焼酎もわが世の春を謳歌したが、それも凋(しぼ)んでしまった。

殊に、国民の日常生活が洋式化した今日では、徳川時代以来の焼芋、イモ煎餅、かんころ餅、丁稚ようかん等では復権は困難である。従って、真にイモの復権を庶幾するためにはカルビーさんのような、仙波糖化工業^{トッ}さんのような、洋式化した近代菓子、パウダー等を通して、新装化した工業化が必要である。